

<p>本草図譜 卷之九 金</p>									
<p>奇南香樹 日二</p>									
<p>沉香樹 日二</p>									

沉香	一種	一種	一種	一種	木蘭	一種	一種
	ミカマホク	シメホク	ミクサマホク	ミカマホク	シメホク	ミカマホク	シメホク
世	世	十九	十七	十五	十三	十一	十
月	一種	一種	一種	辛夷	一種	月桂	天竺桂
	ミカマホク	シメホク	ミカマホク	ミカマホク	ミカマホク	ミカマホク	ミカマホク
世	世		十六	十六	十四		十二



本草図譜 卷之

本草図譜卷之八十

香水類

桂

東都 岩崎常正 著
男 岩崎信正
門人 小山廣孝 校

めかつり

加名鈔 加茂の糸リ小用ヤ、あふり物、のかつりとい
別あり又、根をまわつくと、ついで又別物也

百葉玉

本草加名引
神仙服餌示

水玉

曰書引
大清深

青桂

山桂

曰書引
雜要訣

上唾

曰書引養
生要集

浸

招搖

曰書引
兼名苑

咄者

註

カ子一ルホ一ル

印
能

キ十モ一ム
羅カ子一ル書

本草図譜 卷之八十



本草図譜 卷之八

天曆の御時僧長透立條の大木桂を見ても唐の桂心小まき此りと云ふ今昔物
 詰し見多れ共頃より本邦に桂ありし知し今坪をふかぬ和の桂ふし漢種の
 種数年以前渡り今所々官田に種せし大樹の物あり以下圖不出し集解に桂と桂と
 或ハ一物ト云ハ二物ト見ト云桂と云物者其内桂樹桂と類を令ちり物
 ありし此説以下圖の処不出し茶用を為す各共取らぬ因て名を別れ書ふ
 内桂桂心官桂桂枝のありあり其肉桂と稱す物ハ本草微要ニ乃近根之最厚者
 云本草約言ハ在下最厚者曰肉桂と云桂心と稱す物ハ丹後神邊ハ名之曰心美
 之辞也云又本草約言ハ去其皮而留其近木之味辛而最精者曰桂心
 と云集解ハ保昇藏器の説ト同之可なり官桂ハ桂中の上品なり切口を押入脂
 取出す故ハ通右高山流水とて凡そ養生に物ハ桂枝と稱す物ハ皮の之
 本草微要ハ桂枝即皮上細枝以共皮薄又右蒲桂と云然ハ本草約言ハ桂枝ハ
 薄桂と云ふ人班云又本草通串ハ桂枝最上皮條ハ名桂枝言ハ桂
 條之嫩者也云本草通串ハ桂枝即皮上細枝條又有一種稱桂乃桂之嫩小枝條
 と云二名もつなり説時珍と曰く桂之當ハ本草通串ハ説ハ從ハ桂枝ハ桂と云
 分フハ近來輸木の物の偽物と難ハ派凡或莽草枝或ハ樟枝も桂と云ハ撰
 用ヤ

桂 集解



本草図譜



本草圖譜

卷之八

二

享保年中南京種渡り諸目の官園に種させしれ今大樹とあれり葉對
 生りて本洞一未狭く之考幅一寸余長さ三四寸三の縦道ありて横
 紋亦四時並み不凋嫩枝黃綠色夏月葉の間小き穂を生し黃
 綠色の小花を開き秋月実を結ふ熟すれば黒色ならず樹皮黃
 褐色内赤く味の辛く香氣強く茶用の上品小木ハ辛味薄く
 生ずハ滋味を帶ふ大樹ニ流されハ氣味全かり此物韓保昇の説ハ
 牡桂葉似枇杷葉狭長於菌桂葉一二倍と云是る時珍の説ハ有
 毛及鋸齒と云ハ臆見欽凡桂類ハ毛と鋸齒あるもの多し集解の説
 説志く考ふへり

菌桂

安永三四の頃ろ交趾の桂一本舶来せし此物官園に種させし其葉長
 さ五六寸幅三寸許り鋸齒なく光沢あり葉の紋牡桂と月々三
 の縦道あり凡そ迎へ自ら芳香を發せり天明の初志氣の烈
 しと云はれて今堪たり其後渡り来れと云り



本草図譜

卷之八十

四

和産自生之物之豆別及以小笠原島木の畷回不多一葉の小ふら樟葉
 の如く大ふら樟の葉の如くして光沢あり紋脈肚桂の如く三の縦
 道あり四時凋よれ夏月葉の同淡黄色の小花を同き後
 実を結ふ黒色なり大豆の如く樹皮赤褐色香氣ありて
 味い辛一菜用お宜一又上佐より出る物あり味い辛一香氣強
 一和の種およ一傍物あり船木の品き却て上品之菜小用
 ちる小甚知あり



一種

らんこが豆

らんこが豆

本草図譜

卷之八十

三



本草図譜

卷之八十一

九

爾と云特珍ハ全ク別物ト凡
 常正梅モ不栢ト云イハ栢不
 鬚鬚ナリ不栢ト牡桂樹桂
 ハ此モ此ハ細密ナリ形様ホ
 ルト見世獲頌ノ説是ト云レ
 本邦不有西不西國不有生
 江戸不来其葉甚小ナリ長
 一寸許幅四五分ハ形指甲ノ
 如ク葉ノ背微シモウ紋疎ハ
 牡桂不似夏月葉ノ間一二
 寸ノ穂モ有テ淡黄色ノ小花
 を開キ實モ結ハ冬月実熟トテ
 黒色尖リテ柯樹ノ形不似
 樹皮黄赤色味ハ辛ク香気ハ
 弱ク樹桂不似葉ハ全ク別物ナリ
 樹桂ハ接モトモ見ルハ桂ノ類ナ
 るト知ヘ



一種

をらんといくは花

交趾桂

集解不弘景ノ説ハ經ハ曰桂
 葉如栢葉沃黒皮黄心赤
 色ト云モ薩茶ハ栢葉ノ桂也
 ト云モ知エトモ陶ノ説モ
 保鼻ハ蒸ハ唯ニ種モ知陶
 ト云又獲頌ハ栢葉ノイハ
 今欽州所出者葉密而細恐
 是其類但不作栢葉形為異



本草図譜

卷之六



一種

樹ハ枝ハ似テ葉ハ形円ク
 皮モヤブクニ似テ紋脈三
 道あり葉の間ハ細キ花
 も同ク實も短ク形前條
 不似ト小ナリ



本草図譜 卷之八

本草図譜 卷之八

一種

同書小載、四葉の
形前條小似、
又似こ小あ



一種

同書小載、
物有葉小、
大あ

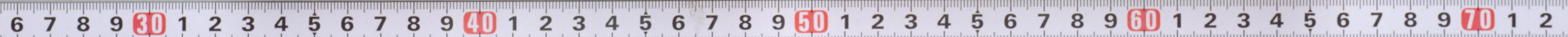


一種

シンナモミ
カワレアリク子アハ
物印忙



物印忙の圓ハ、
花粗、
白色、
立、
辨



水犀 解集

巖桂 上曰

さんもんせい

たす 天竺桂と曰名

花仙 異名

仙客 侯第

檜花 雅通

九里香 國史

金粟 岳字

山友 雜物

天竺清香 巖山主木 上曰

天香 双尺續

狀元花 名物

鳳尾 國書

七里香 上曰

丹桂 國史

紅桂 上曰

樹高丈一丈計ノ葉ハ冬青似テ硬ク周リ小鋸齒アリ 冬不凋 秋の木
莖の中ハ五四処ノ房をふりて黄色の小花簇生し 形四瓣ありて
一分許リノ実を必ル結ハ凡香気四隣小及不頼了 瑞香小似たり 唐山
小ハ枚 品ありて 春花咲く物あり 物理小 識小 春桂と云四季咲く

を秘傳花鏡ハ四季桂と云 毎月咲くものを同書小月桂と云 總して
此品詩文等ハ詠はる 処ハ桂ハ一ノ葉用ノ桂ハあり 集解時珍の
説ハ叢生 巖嶺間一謂之巖桂 俗呼為水犀と云

銀桂 解集 さんもんせい

前條ノ樹葉花と云同く唯花白色之香急も同し

一種 印ト きんもんせい

樹ハ水犀ハ似て葉ハ水犀より潤ク鋸齒深ク頗る狗骨ハ似て細ク
水犀ハ惣て狗骨ノ類を同不きより中ノ村ノ木理目同し水犀を
狗骨小接と云ハよく活るるを此ハ性甚近きもの

本草図譜

卷之八



ぎん
もくせい



ぎん
もくせい

本草図譜

卷之八



本草図譜 卷之八



一種
いぬか
大知
本草

春桂 俗知 江桂 上日
丹桂 一名 江桂
若水厥物類纂
引李德裕集
江木 屏 華史花
本草

本草図譜 卷之八

いぬか



本草図譜 卷之十

百花詩云水畔共花紅即丹桂也云とのハ別ニ此物俗ニまつ内桂
とも云天竺桂の一種アリ葉ハまつふ似て薄く背白色香氣阿ッて
味ハ微辛一ニ三月の頃ろ紅花を開ク形チムろ中一似て美く大和
本草不清水寺奥院の南方ハ冬も春まで赤き花まく亦あり葉
桂の如くたもふも似ると云

天竺桂 かつみろい 松浦ろい たも

山野ハ自生多く甚大樹と云葉の形桂より大小似桂と曰一からん
楸の葉の如く香氣芳草の如くあり葉の間ハ三四花莖を云一白
色五六瓣の小花を開き実を結不相犯子の如く一三四粒一処ハ
下垂れ熟して黒色と云上ハ白粉を生じ樹皮をとりて桂と名け
出せとも先甚く薄く味ハ下品ニ近末根皮を録ニ真の桂皮と
名ナ出ルと云葉用ハ堪及樹皮よりハ微く辛味ありて優ル



本草図譜 卷之十



本草図譜



一種 志ろ乃

樹葉と云ふ
前名と曰く
唯葉の背は白毛あり
香は臭気あり
甚と下西あり
葉の形同くして
大葉稜の葉不
似と穉あり熟
て藍色あり

本草図譜

卷之八



本草図譜 卷之八十

十二

月桂

此西の即竹 天竺桂の實を云ふもの 蘭山の説に此実より蠟をとり
蠟燭に造ると云り

木蘭

とくねんけ

あもくねん

人家庭際不多く栽せ一椀あり叢生し高さ一丈許り樹皮頗る白く
のき小似し二月の末枝の梢に花を開く形蓮花に似て解厚く
其数六七瓣外は深き紫色内は淡紫色色微く香気あり中一寸
許りの心あり葉は花に随て生し形卵の葉に似て大に抄の葉よりハ
柔し

一種

あもくねん

あもくねんと同く人家に多く栽せ樹葉も小似し花はあもくねん
より微く大に鮮白色あり

本草図譜

卷之八十

十二



本草図譜
卷之十一
五



本草図譜
卷之十一
五



さくらんけ



本草
図譜

卷之八

+

十



左
もく
れん

本草
図譜

卷之八

十



本草図譜

卷之二

七



あふりちりり
やまのあふり

本草図譜

卷之二

七



本草
図譜

卷之八



本草
図譜

卷之八



一種 ちふなきつらふ

紅石喬 花丈
五縮

紫蘭 本
皇

樹形さうのたぐ花
紅色を草ふ此物宗
の説の紫の物



本草図譜

卷之八

一種

さめ

ざつり

重葎

辛夷

摩心存志

小本ありて高さ四五尺程の傍小斜
枝も生じ三月頃葉先光花を
開き瓣狭く二十餘瓣散開して
さつりの如く白色あり



本草図譜

卷之八

六

一種 あふさみ

白木蓮

いとあきさんり

生庭 名物
方言



樹高く大ふ二月葉ふえて花を同く六七瓣ありて形木蓮の如く
花白色辛夷の花より大なり香気あり花は従て葉を生れ枝の
葉は似たり是時珍の説に有白色者人呼為玉蘭と云物あり



本草図譜 卷之十

一種

ミヤマ

あぶら

山中ふあり樹
葉とさふふぶ
の如く葉の形微
く円ミあり花
ハ赤に目撃セド



一種

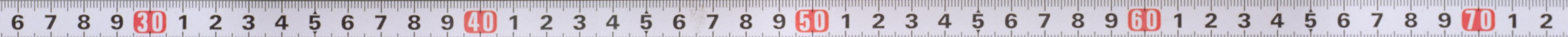
ガシラ

形状前のかく唯花辨ホ
クハ紅を帯トク



本草図譜 卷之十

十九



本草図譜

卷之八

七



本草図譜

卷之八



一種
そなた手
のき



此物藻豎草又古今集三木の傳ふ云片々のハ何物をさけり詳
 あり今日向国高十徳山ハ大水あり圍ミ一抱コ進ミ高ミ丈餘ハ
 至リ葉ハ冬青小似テ長く又辛夷小似テ挾ミ嫩葉青ク大なるハ
 七八五寸ハ及ふハあり花白色ナリ本ハ辺紫を帯ヒ形狀
 辛夷花小似テ五六瓣其數定まり定ハ形長房セあり長サ二
 寸許リ一莖ハ枚子聚附テ辛夷の房と同一香氣又辛夷と同一
 紀州奈知望一木樹あり又筑前香碓の宮ありと云リ

沉香

堅黒

本草和名
引單在苑

黒沈上

雲萃

沉油

同上引
丹葉口訣

阿揭路

最勝
王經

惡揭

嚙日誌

アケルロキコム羅

リタコヤサキコルリ

同上
アキコルホト

和漢通稱して沉香と呼ぶに和産よく唯古へより枯木を持渡るの
 あり一ニ文化年中長崎へ沉香と名付阿蘭人持来り直ニ長崎の官園
 小裁させしる其葉冬青小似て互生れ小水也真偽の処是否相
 又琉球の草木を畫せし内小葉ハ冬青小似て葉の間ハ小白花を
 生ずるものあり沈香水ありと云右ニ種葉の説ハ沈香水似麟
 青色葉似橘葉経冬不凋夏生花白而田秋結實似檳榔大如桑
 葉而味辛と云又藥頌の説ハ巖表録も引く其文也大抵相
 説を考ふハ舶来の物葉の形相似なり亦花實を見れば合
 不辨廣原新註ハ沈香ハ日本不出ると云ハ誤り凡香氣あり
 轉回ハ沈香ハ生せぬ故ハ沈香も唐山の嶺南交趾ハあり其
 全身
 ミ、香あるハ根ハ或枝幹ハ根株定ムルハ人の癩癩も
 如ク脂液集リて香を結ス又其結不時ナリて名ヲ異
 脂集リて結スルを生沈と云水を伐テ数年を埋テ結
 時珍ハ水と伐テ後結スルを生結と云凡沈香ハ赤黒色
 して重ク水に入テ沈むものナリ大ニ炮テ油知るもの
 上品を味ハ辛ク苦も
 帶リ上品は甘味酸味のもの下品は又白色の處多
 あり

を廣東新語に白木香と云用不世に近來舶來の中不た許し不
して桐の木如ちて油ふく心不黄色を帯るものありて凡て全身皆微
香あり芭下岳の蘭人持渡りしの内長き三尺許り切口徑り五寸程心括
て空し此も高家にて暹羅の確皮と呼ぶものあり近來持來るを
漢渡の物の交趾大運羅導之文趾の上岳の加柳似たりと云こ通
用凡時珍の説の石柳拳の如き俗に云大不の中不あり物ふこ午
頭を頭と云類と大不の中不あり芝蘭馬蹄の木の節より出る物あり
各其形不因て名く者あり其外御光様狀頭仔香良様帶破様
と呼ぶもの猶致あり又大泥暹羅の産を産を今ちといへども
清商の皆安南の産と凡是を以て考ふ甘草を南京様福州様
と今ちいぬ甘草の皆安南の産を詳する然るも南京様
福州様と今ちいぬ謂れあり是は唐山と云嶺南の産を上岳と
い蜜国の産を下岳と云故に沈香の一種は伽羅と稱するものあり
押をるに伽羅の沈香月札は奇南一名奇藍と云あり轉りたるあり一日
札は奇南の香の名蓋言南方之奇木也と云々廣東新語を考
るに伽羅と沈香と一類二種あり奇南の沈香を生む木の下の大
蟻穴居をを数年其処に結るとあり沈香奇南の図以下

沉香樹

正口エスホート蘭



一本の蘭書に載れり
其葉ハ冬背不似て本洞
木尖り葉幹の間小子を結ぶ
大さ冬青不似紅色樹皮
刺あり

此図木不
載り図の
小異ありて
恐る同物
ふん

本草図譜

本草図譜

卷之八

物印性小載る回葉の
形竹拍子又冬青葉不
似と狭く尖り有樹皮
黄褐色赤心黄色
葉の間小実を結ふ
又冬青子の如く江
赤色なり



奇南香樹

アリクスムアルース
アルトスホート
南知



本草図譜

卷之八

十三



本草図譜 卷之...

本草図譜 卷之...

同書に載る四葉ハ一
葉ハ六葉対生一葉
止りハ附キ形黄麻の
葉ハ似たり梢ハ二寸の
穂を生して五瓣の小白花
を聞く樹身刺多し藏番
の説ハ沉香枝葉並似積
と云似積者恐是也
云ハハハ類ふらんり



リクスハアニシ
アチニスエーハ
南和

沉香樹



本草圖譜卷之八十一目錄

香木類

丁香	丁香	一種	丁香	黃檀
てんとう	船来の実	一種	雞舌香	七
一丁香	雞舌香	一種	雞舌香	紫檀
一	天竺の産	一種	雞舌香	上同
三	物印の圖	一種	雞舌香	白檀
四	六	一種	雞舌香	集解
五	七	一種	雞舌香	集解

本草圖譜 卷之八十一

